# 小規模計画「DUSTの核生成」 初年度活動報告



計画提案名: DUST

(Determining Unknown yet Significant Traits)

木村勇気 北海道大学 Joseph Nuth NASA/GSFC

Jürgen Blum 地球物理・地球外物理研究所、ドイツ

田中今日子北海道大学野沢貴也国立天文台左近樹東京大学田中秀和東北大学木村宏千葉工大山﨑智也北海道大学渡部直樹北海道大学香内晃北海道大学

Saso Sturm ヨーゼフステファン研究所

Nirmal K. Velu ISAS 竹内伸介 ISAS 松原英雄 ISAS 稲富裕光 ISAS

WG: DUSTの核生成

(206) 第18回宇宙科学シンポジウム、宇宙研、2018年1月10日

### 計画の目的: 宇宙ダストの重要性

□惑星の材料

A. J. Weinberger, *Nature* 433,114, 2005.

□分子形成の基板

N. Watanabe, A. Kouchi, *Prog. Surf. Sci.*, 83, 439, 2008. J. A. Nuth, N. M. Johnson, *Science*, 336, 424, 2012.

星間や星周環境でエネルギー収支を担っているSchutte & Tielens, Astrophys. J. 343, 369, 1989.Takeuchi et al., Astron. Astrophys. 440, L17, 2005.

□ 星形成を促進する(2桁大きな星形成率)

L. J. Tacconi, et al., *Nature* 463, 781, 2010. C. F. McKee, *Science* 333, 1227,2011.

ダストの組成やサイズ・質量を 明らかにする事が決定的に重要

#### 2012年実施(S-520-28号機)

### 計画の目的:全体像



#### 鉄粒子の核生成実験

目的: 鉄を用いて核生成の素過程を解明し、宇宙における鉄の存在形態を理解する。 成果: 鉄原子同士の核生成時の付着確率は、その後の成長時の値よりも4桁も小さいことを明らかにした 星間空間に鉄ダストが存在していない理由を明確にし、鉄は化合物や不純物として固体に取り込まれて いることを示唆した。天文学分野に鉄の存在形態の再考を求める成果である。 核生成の素過程の一端を解明した成果は、国際結晶成長機構におけるSchieber賞受賞につながった。

2015年実施 (S-520-30号機)

Science Advances 2017など



#### 酸化物系(シリカとアルミナ)粒子の核生成実験

目的: 地球を含めた太陽系天体の材料の初期状態を知る。

成果:二波長干渉計による核生成環境の計測に加えて、独自に開発した『浮遊ダスト赤外線スペクトルその場測 定装置』を小型化して搭載することで、天体周辺に浮いているダストの赤外線スペクトルの再現に成功した。 本成果は、参加学生の国際学会におけるポスター賞受賞につながった。Chemistry of Materials 2016など

本小規模計画 (飛翔体:欧州との協力による回収可能な観測ロケット)



#### 炭素賞物質の生成過程の解明

意義:2020年代に、はやぶさ2やOSIRIS Rex、MMXが回収する炭素を含んだ小惑星試料や、次世代赤外線 天文衛星SPICAなどによる観測データの解釈の根拠となる実測データを取得できる。

本小規模計画 (飛翔体: NASAの回収可能な観測ロケット)



### シリケイト粒子の生成過程の解明

目的:酸素星および惑星系星雲におけるシリケイトダストの生成過程の理解

意義・シリケイトは宇宙の至る所に存在しており、地球表層の主要鉱物でもあることから、最も重要な鉱物の一つである。その、核生成過程を理解するために必須の、クラスターからナノ粒子へと成長する過程における 構成分子の付着確率や表面自由エネルギーを求め、赤外線スペクトルの時間変化から結晶化の初期過程を解明することで、宇宙物質の創成史を確立できる。

将来計画 (飛翔体:観測ロケット、ISSなど)



#### <u>氷粒子</u>の生成過程の解明

目的:原始太陽系における、氷の存在形態の解明

意義:氷は原始太陽系での複雑な分子の供給源であり、氷がどのダスト上に、どのような条件で核生成するの かを知ることは、アストロバイオロジーや惑星形成論の議論に必須の礎を築くことになる

# 計画の目的

大目的:137億年の宇宙史における、分子、鉱物 粒子(ダスト)、惑星、そして生命へとつな がる有機物の形成過程や変遷を、物質科 学の視点から理解する。そして、物理、化 学の素過程に立脚した揺ぎ無い宇宙物質 の創成史を確立する。

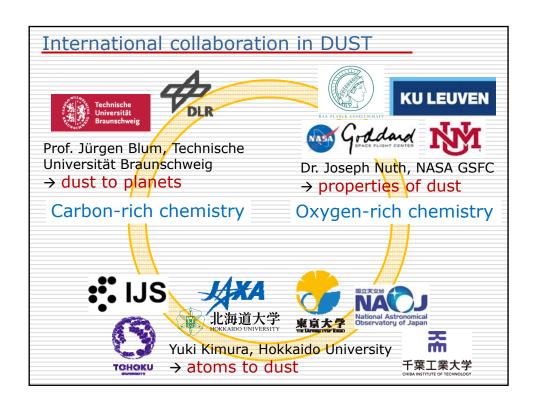
# 本小規模計画の中目的

1. シリケイトダストの核生成過程の解明

(酸素リッチ星周のアストロケミストリー)

2. 炭素質ダストの生成過程の解明

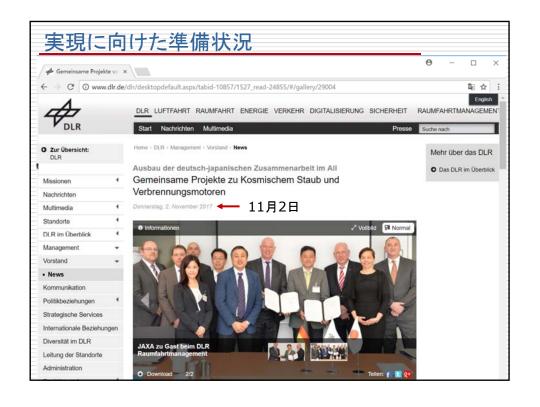
(炭素リッチ星周のアストロケミストリー)



# WG採択後の状況

- □ 2016年12月 宇宙理学委員会WG採択
- □ 2017 年4月 戦略的基礎開発予算(理学)採択
- □ 2017年7月 小規模計画採択
- □ 2017年9月 キックオフ

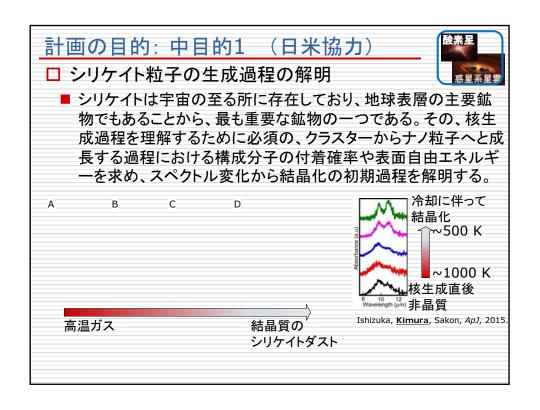
# 実現に向けた準備状況(2017年度) カウンターパートとの打合せ状況 □ 日米協力 ■ 7月: Nuth氏と会合@札幌 ■ 10月:J. A. Nuth III 氏(NASA/GSFC)をPIとして、NASAの プログラム "Astrophysics Research and Analysis" に採 択! Title: Grain Formation Processes in Oxygen-Rich Circumstellar Outflows: Testing the Metastable Eutectic Condensation Hypothesis and Measuring Atom-Grain & Grain-Grain Sticking Coefficients (A Sub-orbital Investigation) ■ 2月:米国チームと会合@札幌 □日欧協力 ■ 6月:M. Abrahamsson氏(SSC)と会合@松山 ■ 7月:射場の下見とAbrahamsson氏との会合@キルナ ■ 7月:K. Sjölander(SSC)と会合@ストックホルム ■ 7月:ドイツチームJ. Blum氏(ブラウンシュヴァイツエ科大学) とT. Driebe氏(DLR)と会合@ボン ■ 1月: Driebe氏(DLR)と会合@宇宙研(調整中)

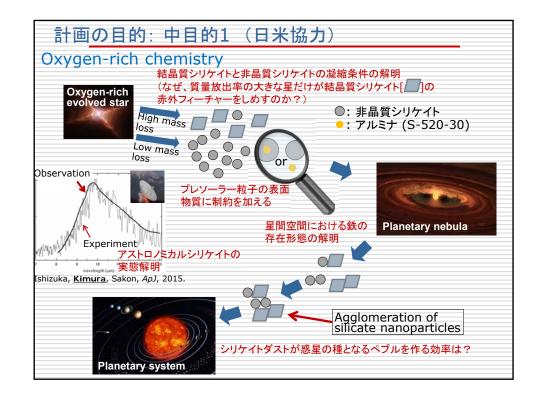


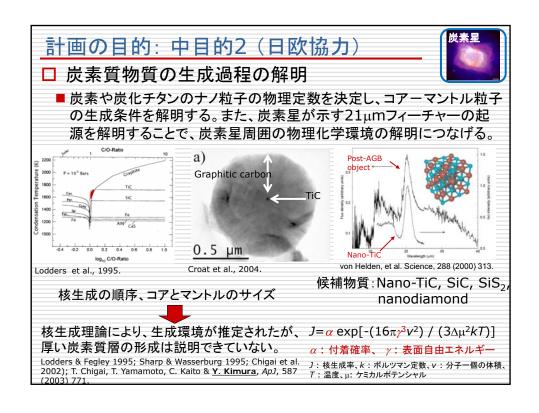


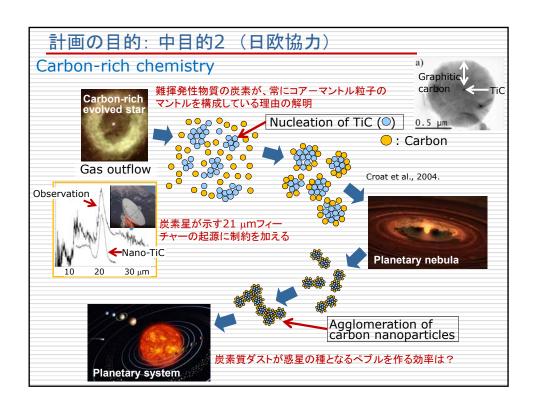


same time.



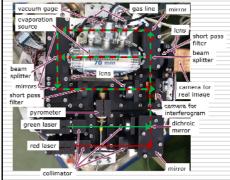






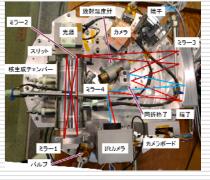
#### 実現手段: 搭載装置 (28、30号機を踏襲)







- □極微量な屈折率変化の検出
- □広視野
- □核生成時の温度と濃度の同時決定



### 特徴

- □ 波長分散型で高時間分解能を有する
- □ 気相状態から結晶化するまで逐次ス ペクトル取得可能
- □ スペクトルは天体と直接比較可能

# 実現手段: 搭載装置

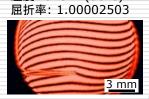
- 二波長レーザー干渉計の特徴
- □極微量な屈折率変化の検出
- □広視野(10-20Φmm)
- □核生成時の温度と濃度の同時決定

雰囲気ガス: Ar 1×104 Pa 温度: 298 K (25°C)

W 線 0.3 mm∮

屈折率: 1.00002714





温度: 323 K (50°C)

10<sup>-6</sup>-10<sup>-7</sup> の屈折率変化を捉えられる。

 $\Delta d = \{ (n(T_0, P_0) - n(T, P)) \times I / \lambda$ 

$$n_{Ar(T,P)} - 1 = \frac{\left[n_{Ar(273.15,P_0)} - 1\right]}{1 + a\Delta T} \frac{P}{P_0}$$

例: 水の屈折率  $N_{H_2O}$ : 1.333

a: 体積膨張率 P<sub>0</sub>: 101333.25 Pa △d: 干渉縞の変位

/: 屈折率が変化する距離

### 実現手段: 搭載装置 浮遊ダスト赤外線スペクトルその場測定装置の特徴 □ 波長分散型で高時間分解能を有する □ 気相状態から結晶化するまでのスペクトル変化を時間を追って取得できる □ 天体と直接比較できるスペクトルの取得 320 111.9s アルミナ - 従来法 107.6s 30号機 観測→ 103.7s 98.9s 計算 17 μm IRアレイカメラ □ 液滴経由の核生成 $\Delta \lambda = \sim 0.03 \, \mu \text{m}$ 半値幅の再現に成功! $\Delta t = \sim 0.1 \text{ s}$ □ 10秒かけて結晶化 □ α-アルミナの生成

# 実現に向けた準備状況:本年度の活動

### 技術課題

- 1. 光学部品を保護しつつ、その光学部品のクリーニング や交換を行う仕組み 小規模計画で解決
- 2. より高精細かつ高速の画像およびデータ取得機構の 開発 小規模計画で進行中
- 3. 対象物質がシリケイトと炭化チタンに代わることに伴う蒸発源の開発 基盤SとNASA予算を主に進行中
- 4. 赤外線の検出波長領域を30号機の9-17 μm から、 長波長側に広げる

8-30 μm (より野心的には40 μm)

戦略的基礎開発予算(理学)で解決

### 実現に向けた準備状況

4. 赤外線の検出波長領域を30号機の9-17 µm から、長 波長側に広げる 8-30 μm (より野心的には40 μm)

2017年3月: DRSおよびRaytheonを訪れて赤外線検出器の最新情報を直接得た 4月:フォトコーディングの池田氏と赤外線の光学系に関して打合せ

検討した赤外線検出器

対応波長

・30号機で用いたAvioのボロメータ

7-17 μm

•NECのテラヘルツイメージャ

2-40 µm以遠

• DRSの640×160のSi:Asアレイ検出器

5-28 μm

・Raytheonの1×1 KのSi:Asアレイ検出器

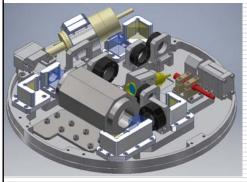
5-28 μm

(Si:Sb検出器は、1-2年のオーダーでは入手できない)

バルク結晶の光学定数から 計算で求めたフォルステライ ト(Mg,SiO<sub>4</sub>)の赤外線スペクト ルの粒子形状効果

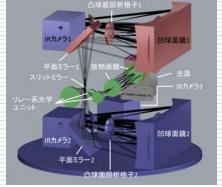
# 実現手段: 搭載装置の現状

浮遊ダスト赤外線スペクトルその場測定装置



### 改善した点

- □ 赤レーザーの品質向上
- □ ダイクロイックプリズムの採用
- □ 画像の高画質高速記録
- □ 拡張性を持ったチェンバーの導入
- □ 試料採取機構の導入



### 改善した点

- □8.1-36 µmの広い波長域
- □ 光学系を分離可能(上部の光学系 を外すことで8.1-23.7 μmに)
- □高い波長分解能 (R = 110-190)

### 実現手段: 搭載装置の現状

### 拡張性を持ったチェンバー

### 試料採取機構







### 本年度の成果

- 1. Yuki Kimura, Sample recovery of microgravity experiments using sounding rockets opens up new sciences, JpGU-AGU Joint Meeting 2017, Chiba, Japan, May 23, 2017. 招待講演
- 2. Yuki Kimura, Shinnosuke Ishizuka, Itsuki Sakon, Tomoya Yamazaki, Kyoko K. Tanaka, Shinsuke Takeuchi, Yuko Inatomi, Microgravity Experiments to Understand Cosmic Dust Formation in the Gas Outflow from Oxygen-Rich Stars, 31st International Symposium on Space Technology and Science, Matsuyama, Japan, June 9, 2017.
- 3. Yuki Kimura, What determines a nucleation pathway?, The 21st American Conference on Crystal Growth and Epitaxy, Santa Fe, New Mexico, USA, July 31, 2017. 招待護演
- 4. Yuki Kimura, Formation processes of nano-minerals via nucleation in vapor, Goldschmidt 2017, Paris, France, August 18, 2017.
- 5. Yuki Kimura, Early stages of grain formation studied by microgravity experiments, 24th Congress and General Assembly of the International Union of Crystallography, Hyderabad, India, August 27, 2017.
- 6. 木村勇気, 煙ってなあに, 第26回先端科学移動大学2017(高等学校訪問授業), 旭川南高等学校、旭川, 2017年11月10日. 出前授業
- 7. 木村勇気, ナノ粒子特有の振る舞いから宇宙の謎に迫る, 第26回先端科学移動大学2017, 旭川市 科学館「サイパル」、旭川, 2017年11月11日. 市民講座
- 8. 木村勇気、Joseph Nuth、Jürgen Blum、田中今日子、野沢貴也、左近樹、田中秀和、木村宏、山崎智也、渡部直樹、香内晃、Saso Sturm、Nirmal Kuma Velu、竹内伸介、松原英雄、稲富裕光, 小規模計画「DUSTの核生成」初年度活動報告,第18回宇宙科学シンポジウム,宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所、相模原,2018年1月10日.
- 9. 木村勇気、<mark>日本学術振興会賞、ナノ</mark>領域の特異性を取り入れた結晶化初期過程の解明とその天文学への応用、2018年2月7日